

ブルームズベリー・グループの「大いなる拡張」とその遺産

菊池 かおり

はじめに

20世紀を代表する建築・デザイン史家ニコラス・ペヴスナーは、モダニズム運動の発展に寄与したアーツ・アンド・クラフツ運動の影響力を認めながらも、その後のイギリスにおけるデザイン文化の停滞を指摘したことで知られる。このような見解は長らく通説として受け入れられてきたが、昨今では「歴史的転回」とも呼べる新たな視点や解釈が加えられつつある(Darling 300)。こうした潮流を踏まえ、本発表では、ヴァネッサ・ベルが言及したブルームズベリー・グループの「大いなる拡張」を、イーヴリン・ウォーの *Brideshead Revisited* を起点としながら分析した。とくに、オメガ工房を中心とした同グループのデザインにまつわる思想や活動が、当時の社会や産業といかに関わり、受け止められてきたのか、そしてデザイン史におけるブルームズベリー・グループの遺産とその意味を考察した。以下にその概観を記す。

イーヴリン・ウォーの小説とブルームズベリー・グループのデザイン

1945年に出版された *Brideshead Revisited* は、第二次世界大戦前の華やかな生活を描いたノスタルジックな小説であると同時に、著者の自伝的要素を含む作品として広く認識されている。しかし興味深いことに、本作には、ウォーが懐疑的な立場をとっていたブルームズベリー・グループにまつわる描写も含まれている。たとえば、主人公チャールズが歴史を専攻するオックスフォード大学の寮に到着して間もなく、自分の部屋にゴッホのヒマワリの複製画やオメガ工房で制作された屏風を誇らしげに飾る場面がある(29)。ゴッホのヒマワリがイギリスに広く紹介されたのは、ロジャー・フライが企画したポスト印象派展であったし、その影響を受けながら、若きデザイナーたちに自由な創造の場と経済的安定を提供することを目的にフライが設立したのがオメガ工房である。小説には、その工房の閉店セールでチャールズが屏風を購入したことまで記されている(29)。また、その部屋でチャールズが同級生と会話する場面においては、フライとともにポスト印象派展を企画したクライブ・ベルの著書 *Art* に関する描写もある(30)。つまり、オックスフォード大学を舞台に描かれるチャールズの部屋を通して、1910年代から20年代にかけて知識階級に享受されたブルームズベリー・グループのデザインやその思想が色濃く現れる。

一方で、それらが必ずしも肯定的に描かれてるわけではないことにも留意が必要である。作品における現在、すなわち1940年代のチャールズにとって、当時の部屋は「偽りの早熟さ」を体現したものにとすぎず、ウィリアム・モリスの作品に代表される伝統芸術を飾るべきだったという後悔を交えて語られている(29)。このようなチャールズの芸術に対する価値観の転換は、1930年にカトリックへ改宗したウォー自身にも見られる。そのため、作中におけるブルームズベリー・グループの表象を、彼の宗教観と結び付けて、近代化の負の象徴として考察することも可能だろう(Bosh 609)。しかし本発表で着目したのは、1940年代になって改めてブルームズベリー・グループのデザインが、モリスに代表されるイギリスのデザイン史に、逆説的であったとしても接続されている点である。なぜならば、従来の近代デザイン史において周縁化されてきたイギリスのデザイン文化の位置づけをふまえると、このようなウォーの描写は重要な意味を持つからである。

ニコラス・ペヴスナーとオメガ工房

近代デザイン・建築史において、長らく金字塔のように君臨していたペヴスナーの著書 *Pioneers of the Modern Design* は、モダン・デザインの礎を築いたパイオニアとしてモリスを讃えながらも(24)、彼の死後、そのイニシアチブを欧米諸国、特に大量生産や機械化を推し進めたバウハウスに代表されるドイツに譲ったとして、イギリスのデザイン文化の停滞を痛烈に批判した(29)。一方で、1941年にイギリスの建築月刊誌 *Architectural Review* に掲載されたペヴスナーのオメガ工房に関する記事に着目すると、その歴史観に揺らぎが生じることになる。たとえば、先に見たウォーの小説と同様にペヴスナーの記事においても、オメガ工房はモリスの系譜に位置づけられる一方で、その革新的なデザインは、ピカソに代表されるキュビズムの絵画やバウハウスのテキスタイルとの関連において考察される。つまり、ゴッホのヒマワリ同様に、フライとベルが企画したポスト印象派展ではじめて広くイギリスに紹介されたピカソのキュビズムを、キャンパスの枠組みを超えて、日常生活を彩るデザインにいち早く取り入れたオメガ工房の功績を、ペヴスナーはこの記事を通して実証することを試みたのである。

実際、ピカソのキュビズムを彷彿とさせる幾何学模様のデザインが世界を席捲する契機となったのは、1925年のパリ万国博覧会(通称、アール・デコ博)であり、バウハウスでもオメガ工房のテキスタイルと酷似した商品

が制作されているが、それらはオメガ工房が閉店した後のことである。このような革新的なデザインをいち早く実践しながらも、その商品が大衆に、そして国際的にも普及しなかったオメガ工房の最大の敗因として、ペヴスナーはフライの経営戦略をあげる。たとえば、モリスのデザインと違い、オメガ工房のテキスタイルは機械との親和性が高いデザインであったにもかかわらず、フライは商品の大量生産を拒み、若きデザイナーの創造性を重視した (Pevsner “The Omega Workshops,” 48)。そのため、ウォーの作品でも示唆されているように、知識層の顧客にとっても高価な商品ばかりとなり、国際的に発展したバウハウスのような成功は収められなかったというのである。しかし、このような敗因を踏まえつつも、ヨーロッパ諸国に先駆けてオメガ工房で実践された近代的なデザインの歴史的価値を主張することで、本記事は締めくくられている。つまり、モリス以降、ヨーロッパやアメリカに後れを取り停滞していたとされるイギリスのデザイン文化の中にこそ、その後、国際的に流通したデザイン性、少なくともその萌芽が存在していたことを、ペヴスナー自身が認めているのである。

文学・絵画・デザイン・建築の交差にみる可能性

ウォーの小説において近代化の表象として描かれるブルームズベリー・グループのデザインを、脱領域的にペヴスナーのデザイン史観と接続することで立ち上がるのは、従来の近代デザイン史とはことなるヴィジョンであり、イギリスのデザイン文化が内包する可能性とも言えるだろう。そして、その接続を介してウォーの作品もまた、これまでとは違う、あらたな視点で再考・評価される可能性が浮き彫りになる。

実際、ウォーの関心は、キュビズムやブルームズベリー・グループのデザイン思想にとどまらず、ヨーロッパを中心に展開された近代建築の潮流にも寄せられていた。たとえば1929年には、その潮流を牽引した一人、ル・コルビジエの著書 *The City of Tomorrow* の書評を発表している。その書評で、ウォーはコルビジエの建築理念に理解を示しつつも、ヨーロッパの建築の潮流とは一線を画したイギリスのデザインを同等に評価した書籍 *The New Interior Decoration* を擁護する姿勢を見せている (Waugh “Sites of the Future,” 6)。セリナー・トッドとレイモンド・モーティマーによって執筆されたその書籍には、多くの写真が掲載されているが、そこにはオメガ工房をはじめとしたブルームズベリー・グループのデザインも多数含まれている。この事実は、ウォーが近代建築の潮流を外側から傍観していたのではなく、その内部構造を理解したうえで、イギリス固有のデザイン文化の価値を再定位しようとしていたことを示している。すなわち彼は、近代建築の直線的な進歩史観に与するのではなく、その傍らで展開されていたもう一つの近代的デザインの可能性に光を当てていたのである。

その意味でも、ウォーの文学作品で描かれるブルームズベリー・グループのデザインは、彼の宗教観にもとづく批判の対象や、華やかだった戦前の時代描写の装置にとどまらず、近代性をめぐる複数の価値体系がせめぎ合う場として作用していると言えるだろう。そして、文学・絵画・デザイン、さらには建築までもが交差するこの地点に立つとき、ブルームズベリー・グループは前衛芸術運動の一環として位置づけられるだけでなく、近代デザイン・建築史に内在する別様の可能性を体現する存在として、その遺産の意味が再浮上するのである。

参考文献

Bell, Clive. *Art* [1914]. Ed. by J.B. Bullen, Oxford U.P. 1987.

Bosh, Great. “Modern Art in *Brideshead Revisited*.” *Religion and the Arts*. Vol. 20, Issue 5, 2016, 608–36.

Darling, Elizabeth. “Institutionalizing English Modernism 1924–33: From the Vers Group to Mars.” *Architectural History*. Vol. 55, 2012, 299–320.

Pevsner, Nicolas. “The Omega Workshops.” *The Architectural Review*. Vol. 90. No. 536. 1941, 45–48.

----. *Pioneers of the Modern Design from William Morris to Walter Gropius*. Faber & Faber, 1936.

Todd, Dorothy and Raymond Mortimer. *The New Interior Decoration: An Introduction to Its Principles, and International Survey of Its Methods*. B. T. Batsford, 1929.

Waugh, Evelyn. *Brideshead Revisited* [1945]. Penguin, 2000.

-----. “Sites of the Future.” *The Observer*. August. 11, 1929, 6.

-----. “In Defense of Cubism.” *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*. Ed. by Donat Gallagher, Little Brown, 1984. 6–8.